

令和4年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第7号

発表日：令和4年10月26日

岩手県病害虫防除所

1 情報の要点

(1) 麦

ア. 雪腐病は平年並の予報ですが、例年発生する圃場や県北部、高標高地帯等の根雪期間が長い地域では、雪腐病の種類に応じた防除を必ず実施しましょう。

(2) りんご

ア. 腐らん病は平年並の予報ですが、多発園では、落葉期に特別散布を実施しましょう。

イ. 野ネズミは平年並の予報ですが、積雪前にできるだけ園内を清耕、清掃し、野ネズミが生息しにくい環境にしましょう。

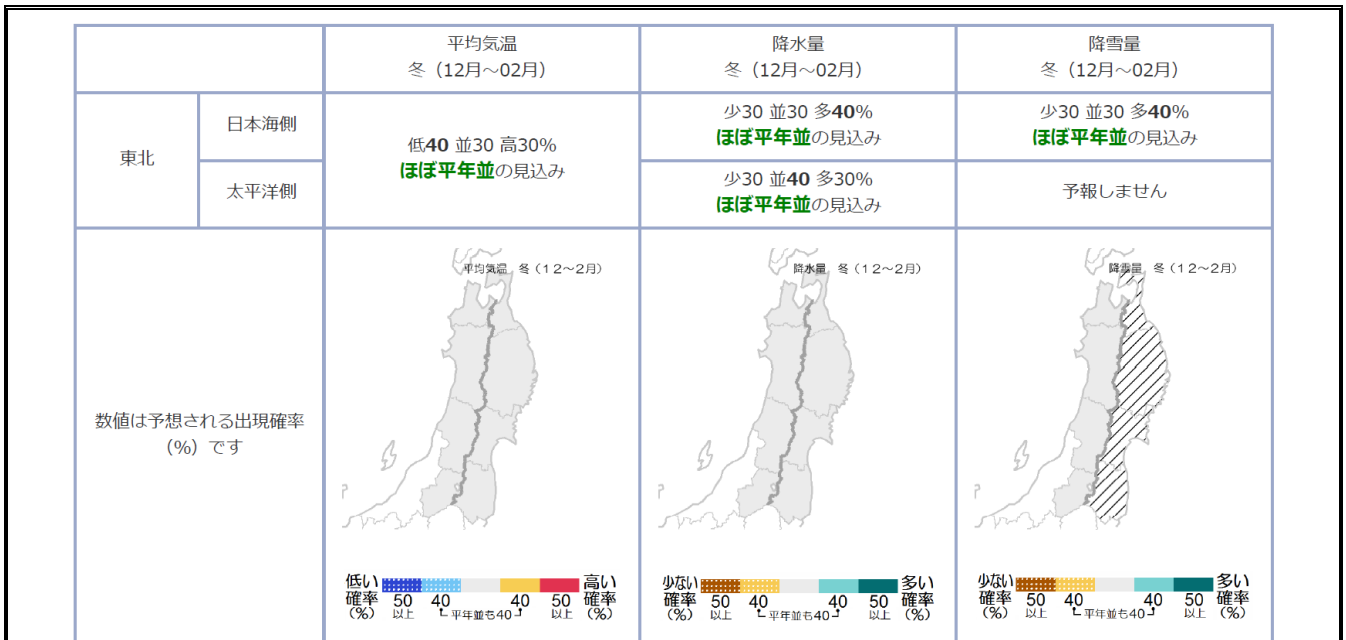
ウ. 今年ナミハダニの発生が多かった園地では、粗皮削りを丁寧に行うとともに、マイカ線の下も確認し、集団越冬が確認された場合はマイカ線を交換しましょう。

2 農薬の安全・適正使用

農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。

3 寒候期予報（12月～2月、9月20日発表）

(1) 冬の気温及び降水量はともにほぼ平年並の見込みです。



図は気象庁ウェブサイト (<https://www.jma.go.jp/jma/index.html>) より引用

【利用上の注意】

本資料は、令和4年10月12日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・ 農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・ 農薬使用の際は（1）使用基準の遵守 （2）飛散防止 （3）防除実績の記帳を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/index.html>



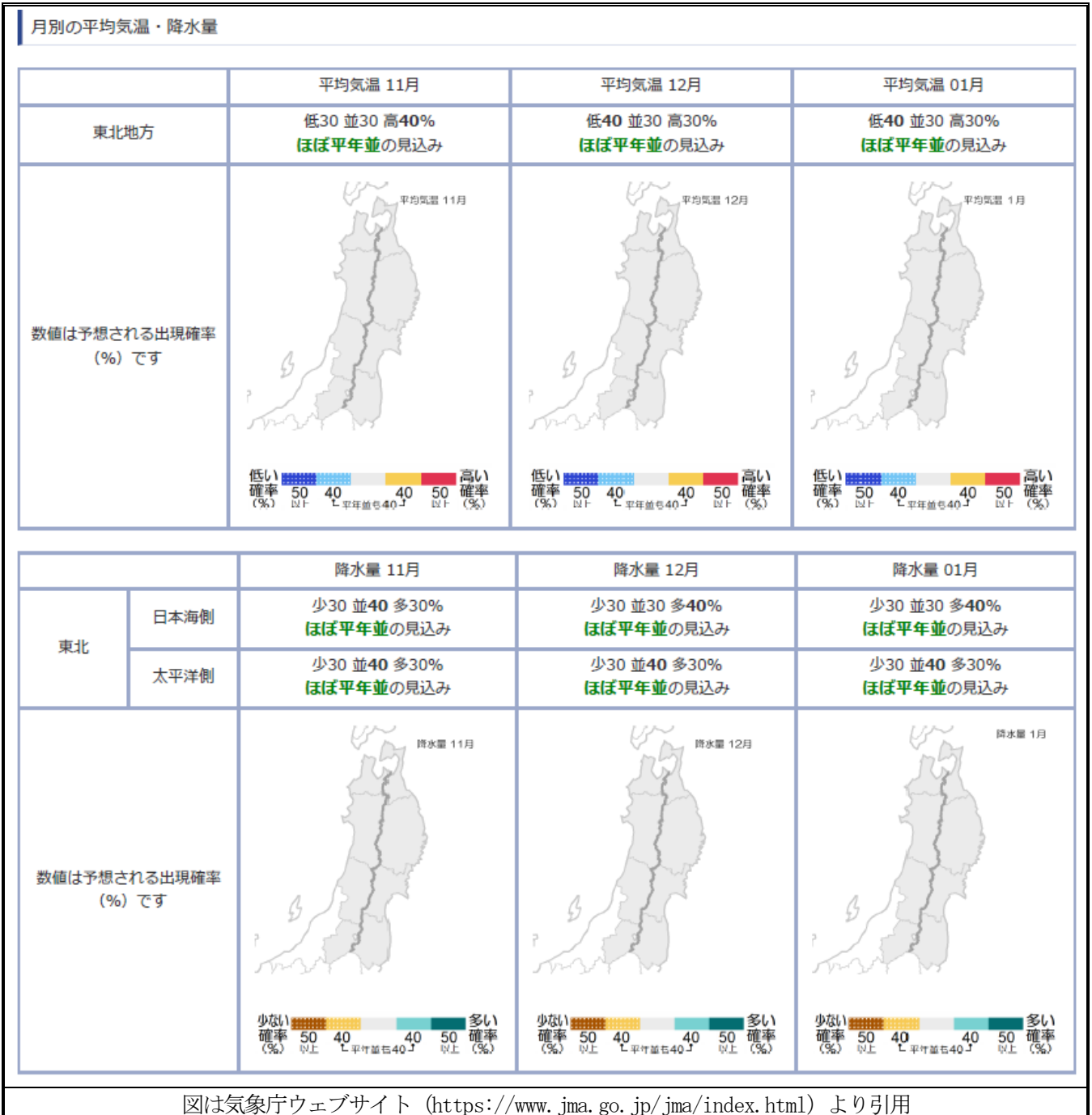
4 3ヶ月予報（11月～1月、10月25日発表）

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

11月 平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みです。

12月 平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みです。

1月 平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みです。



麦類病害

1 予報の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
雪腐病	—	並	(1) 今年春の全県の発生圃場率は平年並だった。(±) (2) 寒候期予報では、冬期間(12～2月)の気温・降水量ともにほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【雪腐病】

(1) 例年発生する圃場や県北部、高標高地帯等の根雪期間が長い地域では、雪腐病の種類に応じた防除を必ず実施する。

なお、小麦品種の耐雪性は表1のとおりである。特に、「銀河のちから」は耐雪性が「やや弱」で被害が出やすいため、防除に努める。

表1 小麦品種の耐雪性

品種	耐雪性
ナンブコムギ	強
ゆきちから	強
銀河のちから	やや弱

(2) 小麦の雪腐病は病原菌が数種あり、発生する種類により防除薬剤が異なるので、表2を参考に薬剤を選択する。雪腐小粒菌核病(黒色、褐色)と紅色雪腐病が混発する圃場では、同時防除が必要となる。なお、ベフラン液剤25で種子消毒した場合は、紅色雪腐病を対象とした根雪前の茎葉散布を省略できる。

防除時期は根雪間近(表3参照)とし、タイミングを失しないようにする。なお、フロンサイドSCは残効が長いので、根雪開始の1か月程度前に散布しても防除効果が得られる。

(3) 薬剤散布後の気象状況によっては、再散布が必要な場合があるので、表2を参考に対応する。

(4) 融雪が遅れると多発するので、春先の消雪促進に努め、圃場の排水を良くする。

表2 雪腐病の防除薬剤(小麦)

農薬名(商品名)	紅色雪腐病	雪腐小粒菌核病	使用時期	再散布が必要なケース
フロンサイドSC	◎	○	根雪前	薬剤散布～根雪開始の期間に積算降水量120mm以上または日最大降水量65mm程度の降雨があった場合
トップジンM水和剤	○	○		薬剤散布後に2週間以上根雪にならなかった場合または30mm以上の降雨があった場合
ベフラン液剤25	◎	○		
バシタック水和剤75 ※ キノンドー水和剤80、オキシンドー水和剤80	○	○		

◎：効果高い、○：効果有り、※：麦類として登録

表3 根雪間近の目安

地域	根雪間近
平坦部	12月上旬～中旬
山間部	11月下旬～12月上旬

りんご

1 予報の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
腐らん病	—	並	(1) 本年の発生園地率は平年よりやや低かったが、胴腐らんの病斑数は平年並だった。(±) (2) 寒候期予報では、冬期間(12～2月)の気温はほぼ平年並の予報。(±)
野ネズミ	—	並	(1) 寒候期予報では、冬期間(12～2月)の降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+):多発要因、(±):並発要因、(-):少発要因、(- -):重要な少発要因

2 防除のポイント

【腐らん病】

- (1) 多発園では、落葉期に特別散布を実施する。また、散布にあたっては、薬液が枝幹に十分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 年内から厳冬期の剪定は、剪定痕が枯れ込むことがあり、感染や発病を助長するので避ける。
- (3) 発生園では、剪定の切り口に殺菌塗布剤を必ず塗布する。
- (4) 発病や前年の病斑からの再進展は、3月頃から確認されるので、処理済みの病斑、切り口癒傷部、摘果痕や採果痕等注意して観察し、早期発見に努める。本病は、発生樹及びその隣接する樹に次年度も発生する傾向があるので、注意して観察する。
- (5) わい性樹の胴腐らんでは、側枝基部の発病が多いので、この部分をよく観察する。
- (6) 剪除した枝や削り取った病患部は、園地内に残さないよう処分を徹底する。
- (7) 本病は薬剤だけの防除は難しく、処置の徹底により伝染源を少なくすることが重要である。できるだけ地域単位で伝染源量の低減に努める。また、放任園は伐採処分する。

【野ネズミ】

- (1) 積雪前にできるだけ園内を清耕、清掃し、野ネズミが生息しにくい環境にする。
- (2) 特に草生、敷草等を行っていると、野ネズミが巣を作りやすいので、積雪前に幹の周囲を清耕にする。
- (3) 忌避剤の使用は、根雪前に行う。忌避剤だけでは十分な効果が得られない場合もあるので、殺そ剤による駆除と併用する。
- (4) 殺そ剤の晩秋の処理は、積雪前までに行うようにする。殺そ剤の駆除の効果を上げるためには、りんご園に限らず周辺の農地も含めて地域で一斉に処理することが望ましい。
- (5) 被害に遭いやすい苗木や若木は、被覆により食害を回避する。被覆は、金網や合成樹脂のプロテクター等により、樹幹を根雪部より高さ約1mまで行う。
- (6) 2月以降、樹の周りの雪が早く解けると特に加害されやすくなる。この時期には数回、幹の周りの雪をよく踏み固めておく。

【ナミハダニ】

- (1) 主幹、主枝等の粗皮下や、枝の誘引等に使用しているマイカ線の下、下草で越冬する。今年発生が多かった園地では、粗皮削りを丁寧に行うとともに、マイカ線の下も確認し、集団越冬が確認された場合は交換する。

3 防除上の注意事項

- (1) 忌避剤、殺そ剤の使用にあたっては、包装等に記載されている内容を良く確認し、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用時や保管時に子供やペット、野鳥等が誤食しないように取り扱いに十分注意すること。